

尼崎の森中央緑地 自然共生サイト（OECM）に兵庫県の県立公園で初認定！

石丸京子・岡花泉見（尼崎の森中央緑地パークセンター）

1. 尼崎の森中央緑地とは

兵庫県立尼崎の森中央緑地(以降、尼崎の森)は、尼崎市の臨海部工場跡地の埋立地に作られた県立の都市公園で、2006年から「生物多様性の創出」を目指した「100年の森づくり」を、多くの県民、企業、学校などの参画と協働のもとに進めています。周辺地域（武庫川、猪名川流域）に自生する植物から、タネを採取して育成した「地域性苗」のみを植栽し、地域の多様な植生を創出することを目指しています。これまでに草本木本合わせて503種以上のタネを採取し、308種を植栽しました。樹高11mに達する林分では森林性の鳥や昆虫も増え、生き物いっぱいの森が育ちつつあります。



図1 現在の尼崎の森中央緑地



図2 100年後の完成予想図

2. 30by30 と自然共生サイト（OECM）

30by30（サーティバイサーティ）とは、2030年までに地球の陸と海の30%以上で生物多様性の保全を図ろうとするもので、2021年に決まった国際的な約束です。日本では、現時点で陸域の20.5%、海域の13.3%が保護区として守られていますが、30%の目標を達成するために、地方自治体や民間が所有・管理する土地で生物多様性の保全が図られている区画を、環境省が「自然共生サイト」として認定することになりました。

2023年10月、尼崎の森では植樹地のうち約12haが自然共生サイトに認定されました。

3. 尼崎の森の生物多様性



図3 30by30 ロゴマーク

尼崎の森では、工場跡地の埋め立て地に、ゼロから人の手によって生物多様性を作り出すため、生物多様性の3つの段階「生態系の多様性」「種の多様性」「遺伝子の多様性」すべてに配慮した、新しい森づくりに挑戦しています。まず尼崎の森の「地域」の範囲を、周辺を流れる武庫川流域とそれに連なる六甲山系及び猪名川の流域に限定し、そこに存在するさまざまな森林や草原の植生の創出を目指しています。海風を強く受ける場所にはウバメガシ林、やや内側にアラカシ林やシイ林などの照葉樹林を配置し、人の集まる芝生広場周辺では、コナラ・アベマキ林やエノキ林など明るい照葉樹林を目指します。また秋の七草などの野草を楽しむことができるチガヤ草原、ススキ草原も育成します。多様な植生を育成することは、導入する植物の「種の多様性」を高めるだけでなく、そこに生育する昆虫や鳥など動物の「種の多様性」を高め、「生態系の多様性」を創出することにつながります。特に、「遺伝子の多様性」にこだわり、植栽する植物はすべて、この地域の中に自生する植物から採取したタネから

育てた「地域性苗」を使用します。

このような生物多様性の創出にこだわった緑化事例は、その期間においても規模においても、国内には類をみないものと思います。

森づくりが始まって19年目の現在、草原には、多種のバッタ類、カマキリやセッカ、ヒバリなど草原性の生物が見られ、森ではキジバトが巣を作ったり、オオルリやサンコウチョウなど多くの渡り鳥が観察できるようになりました。また、キバラハキリバチやメボソムシクイなどの希少種も観察されています。さらに、地域で絶滅の危険にある植物種の苗を育成することで、生育域外保全の役割を果たすことも目指しています。



図4 2006年植栽開始時の葉はじまりの森



図5 植樹後18年経過したはじまりの森

4. 30by30 アライアンス

30by30 アライアンスは、30by30 目標達成に向け、自然共生サイト（OECM）を支えるための活動を行う企業・自治体・団体を、環境省が認定しているものです。参画と協働の森づくりの中心主体である市民団体「アマフォレストの会」（森づくり開始に先んじて実施した「森づくり勉強会」を母体にして、森づくり開始と同時に結成。現在会員約50名）と、公園の現指定管理者である「尼崎の森中央緑地パークセンター」は、自然共生サイト認定に合わせて、アライアンスに登録申請をし、今後も連携して、この生物多様性の森づくりを支えていくことを表明しています。

5. 自然共生サイト認定と今後の課題

生物多様性の現況と参画と協働の担い手が確保されていることが、まだまだ若い尼崎の森が自然共生サイトの認定を受けることにつながったものと考えています。

人為的な自然再生である尼崎の森が自然共生サイトに認定されたということは、自然がいったん破壊された地域でも、同様に自然再生の試みを行えば、自然共生サイトに認定されるような生物多様性を創造する可能性があるということです。尼崎の森では、森の育成状況、動物種の出現など、兵庫県がモニタリング調査を毎年行っています。尼崎の森の事例が、これからの自然再生の先進事例として役立つためには、これらのモニタリング調査をしっかりと記録し、保存しておかなければなりません。

また、人為的に作る生態系は継続的に管理をしなければ維持することはできません。「100年の森づくり」へ向けて、さらに高い生物多様性を目指し、活動を継続させるために、行政、指定管理者、市民団体、企業など、参画する多様な主体がそれぞれに多様なニーズや希望を持ちながら、長いプロジェクトを参画と協働でどのように行っていくのか、その手法に関しても、貴重な先進事例となると思います。今後も尼崎の森の応援団となるアライアンスメンバーを増やすことで、息の長い活動につながることを期待しています。